

「女帝 小池百合子」蜚語楼に喝采送る危うさ 100人超の証言 集め数奇な半生描く 2020/07/09 12:30



東京都知事選で歴代2番目の得票数で再選された小池百合子氏（67）。その数奇な半生を描いた「女帝 小池百合子」が、ノンフィクション作品として異例の20万部を超す売れ行きとなっている。3年半をかけて取材した著者の石井妙子さんが浮き彫りにするのは、聞き心地の良い甘美な物語を上書きしてきたポピュリスト政治家の実像だ。「小池氏は私たちが生み出した平成の写し鏡。蜚語楼（しんきろう）に喝采を送るような危うさをはらんでいることをもっと知るべきだ」と警鐘を鳴らす。（加藤正文）

「芦屋令嬢」「カイロ大首席卒業」と称した看板を武器にキャスター、政治家へ。政界再編の中で政党を渡り歩き、環境相、防衛相を歴任、いま首都のかじ取りを担う。

「学歴の詐称疑惑が注目されたが、書きたかったのは平成という時代そのもの。平気でうそをつくという自身の問題もさることながら、なぜこうした人物が生まれ、なぜ選ばれ続けるのか。政治のあり方、メディアの責任、ひいては民主主義を問い直したかった」

100人を超す関係者の証言を集めた。徹底した現場取材、丹念な資料の読み込み。何より土地に刻まれた情念やエピソードの背景を読む感受性が、作品に深みと凄（すご）みを与えている。

〈その場に立った時、「芦屋令嬢」という言葉が、初めて胸に切なく迫った〉

甲南女子中・高を経て関西学院大中退。経歴をたどり、神戸・阪神間の雰囲気を感じたのは「階層の格差」だ。富めるものは富み、貧しいものは貧しい。「上へ上へ」という脇目もふらぬ上昇志向は芦屋で育ったことが影響している

◇権力を手に

平成とともにテレビから政界へ。日本新党、新進党、自由党、保守党、自民党。機を見るに敏、風向きを読むのに長（た）けていた。

〈男の為政者に引き立てられて位を極め、さらには男社会を敵に見立てて、階段を上っていった。女性初の総理候補者として、何度も名を取り上げられている。ここまで権力を求め、権力を手にした女は、過去にいない〉

女性の政治進出は日本は遅れている。女性史に力を注ぐ石井さんは小池氏の「快進撃」に際して気持ちは重く塞（ふさ）ぐばかりという。実現したい政策や政治哲学は見え、目立ちたいという目的意識が前に出る。

かつて小池氏と衆院旧兵庫2区で戦った土井たか子氏（元衆院議長、故人）を挙げて「毅然（きぜん）として人間に核があった。そんな女性政治家がいなくなった」。

女性議員は増える傾向だが、「男性がスカウトしてきたような人ばかりで男性社会に過剰適応しようとする。首相に好かれようと妍（けん）を競う。女性だからと選ぶとだまされてしまう」と嘆いた。

◇期待裏切る

紅一点を好み、権力者に近づき、引き上げられたいと願う。その一方で自身と競合する女性を敵視し、社会的弱者への関心は薄い。

2005年、環境相在任中、尼崎市のクボタ石綿禍が発覚。国は救済法制定に動く。補償に踏み込むのか。患者らは古い男性政治家や官僚出身者ではなく「女性でクリーンで善良そうな」小池大臣に好感を抱く。

尼崎で患者と面会した際、「崖から飛び降りますよ」と期待させる物言いをする。可決された法案の内容は補償にほど遠く、官僚が主導した「見舞金の延長」にとどまった。

16年、「崖からー」「ジャンヌダルクになる」と叫んで都知事に就任。築地から豊洲への市場移転の際も対応は石綿禍と同様だった。「築地は守る、豊洲を活（い）かす」と築地に市場機能を残すことを期待させる発言をしたが、反故（ほご）に。また17年の衆院選で新党「希望の党」を率いた時、当時の民進党との合

流方針を巡り、政策や理念の合わない候補者を選別する「排除の論理」をふりかざした。その発言を機に失速し敗北した。

◇ビニールシート

石井さんが小池氏を注視し始めたのは前回の都知事選だった。自民党都連とのバトルで注目を集め、フィーバーが巻き起こった。駅前にはシンボルカラーの緑を身につけた人で埋まった。

「人々は彼女を見て空をゆく飛翔（ひしょう）体に例え、すごいエンジンを持つロケットみたいだとほめそやす。私は疑問を持った。この人はただのビニールシート。風に舞って高く上がるが、落ちてきたらエンジンも翼もない。でもビニールだから強い。どんな風にも乗れてしまう」

スポットライトを浴びるほどに表情が輝く。折しも新型コロナウイルスの感染拡大で露出が増えている。

「小池百合子というのは実は存在せず、彼女が作り上げた理想のキャラクターなのだろう。そんな蜃気楼のようなものに大衆は快哉（かいさい）を叫ぶ。メディアであおる手法は維新の吉村洋文大阪府知事や橋下徹・元府知事に通ずる。軽視していると危うい。扇動された後の殺伐とした光景を想像しなければならない」

【いしい・たえこ】ノンフィクション作家。1969年神奈川県茅ヶ崎市生まれ。白百合女子大大学院修士課程修了。伝説の銀座マダムの生涯を書いた「おそめ」、謎に包まれた映画女優の実像に迫った「原節子の真実」（新潮ドキュメント賞受賞）など。

「女帝」石井妙子さんが見た小池都知事の“冷ややかな圧勝”

毎日新聞 2020 年 7 月 9 日 13 時 00 分(最終更新 7 月 10 日 04 時 02 分)

古川宗

今回の東京都知事選で史上 2 番目の得票数を獲得し、2 期目の当選を決めた小池百合子氏(67)。だが知事選で最も注目を集めたのは、小池氏ではなくあの本かもしれない。ベストセラーになっている評伝「女帝 小池百合子」(文芸春秋)のことだ。発売から約 2 カ月で 20 万部を突破し、他陣営の街頭演説の際に言及されるほど。「女帝」を世に送り出した当事者の目には、この選挙はどう映ったのだろうか。ノンフィクション作家の石井妙子さん(51)に聞いた。【古川宗/統合デジタル取材センター】

「コロナを選挙に利用した」

都知事選の結果が出た翌日、都内で石井さんに会った。開口一番、「『冷ややかな圧勝』ですよね」と表現した。

「冷ややか」とは？ 「『圧勝』といっても(有権者の)熱が伝わってこなかったから。得票率が高いのは確かですが、それは自民党が対抗馬を立てなかったからでしょう。新型コロナウイルスで大変な中で、都民は『トップを代えたくない』という消極的な支持もあったでしょう」と分析した。

都知事選での再選から一夜明け、取材に応じる小池百合子都知事＝東京都新宿区の東京都庁で 2020 年 7 月 6 日午前 9 時 32 分、手塚耕一郎撮影

冷ややかな圧勝——。確かに、小池氏は「オンライン選挙」を掲げ、街頭演説はゼロ。新型コロナウイルス対策という「公務」を優先し、淡々とこなすことで、メディアへの露出を増やし、再選を確実にたぐり寄せたようにも映る。

ただ、それも石井さんによれば小池氏流の「メディア操作」だという。「『見える化』ではなく、『見えない化』をしたんです。街頭に立てば、あちこちから野次が飛んでくる。私の本を読んだ人からの批判もあったでしょう。小池さんは現職だから、対抗馬からの挑戦を受ける立場です。つまり、彼女の得意な被害者のポジションをとれない。攻めるのは得意だけど、守るのは不得意なんです。だから、テレビの討論会に出ることも避けた。コロナを選挙に利用したのです」

「女帝」を執筆した理由とは

都庁の中にこもり、つつがなく再選に持っていった小池氏にとって、唯一の想定外だったとすれば、「女帝」の大ヒットだろう。5月末の発売からたちまち、ツイッターを中心に話題となり、著名人らが「都知事選に投票権を持っている人は、読んで判断したほうがいい」といった感想が相次ぎ、大規模書店でも一時品切れ状態が続く異例の売れ行きとなった。石井さん自身もここまで売れるのは予想外だったそうで、「編集者の方と『売れ残ったらどうしよう。永田町までリヤカーで行って、引き売りでもしようか』と冗談を言っていたほどなんですよ」と笑う。

現職政治家の評伝で、しかも400ページを超える大著。そんな硬派な本が異例のヒットとなったわけだが、そもそも石井さんは、小池氏について評伝を書くことには消極的だったという。「編集者の方から依頼されて、小池さんの著書を読んだんです。でも何を読んでも中身が薄くて、思想も何も感じられなかった。人物として浅すぎて、掘り下げるだけの意味がなく、評伝作品にはならないのではないかと判断して一度は断ろうとしました」と打ち明けた。「でも、逆にどういう切り口で臨めば作品として成立するか、本にするだけの意味が見いだせるだろうかと考えてみたんです。小池さんが政界の中枢に30年間いることだけは確か。政権が代わっても、常にトップの周辺にいるという希有（けう）な人です。彼女を描くことで、平成という時代が描けるのではないか、平成の政治史を振り返り総括することができるのではないかと思います」

「男性中心社会が作り出したモンスター」

確かに、小池氏の政治人生は、平成の政治史そのものと大きく重なり合う。ニュースキャスターを辞し、参議院に初当選したのは1992（平成4）年。細川護熙氏が代表を務める日本新党からだった。翌年行われた衆院選では、参院議員からくら替えして立候補し当選した。以降、所属政党を変えながら、小沢一郎氏、小泉純一郎氏といった有力者に近づき、政治の中心に座ってきた。浮き沈みの激しい政界で特異な存在ともいえるだろう。「政界渡り鳥」とも異名をもつゆえんでもある。「平成は世の中が流動的で、根無し草的な人が増えた時代だと思うんです。本業がわからないけど、なんとなく活躍しているといったメディアの有名人だとか。政界に入るハードルもゆるくなり、テレビで名前や顔を知られた人が数多く政界に入ってしまった。小池さんはそのさきがけでした。小池さんがもっと早く生まれていても、もう少し遅く生まれていても、ここまでの活躍はなかったでしょう。極めて平成的な人なんです」

石井さんは「女帝」の執筆にあたり、関係者100人以上を取材し、小池氏の著書や都議会での議事録なども読み込んだ。フェミニズムの観点から、女性学研究者の田嶋陽子さんにも話を聞いた。そこで浮かび上がってきたのは、永田町という究極の男社会の中で、居並ぶ

男たちと対立せず、むしろすり寄ることで、より高い地位を目指そうとする女性政治家の姿だった。「小池さんは、男性中心社会が作り出してしまったスターであり、モンスターだと思います。男社会とは正面から戦わず、男の人にひっぱってもらって泳いできた」。

ただ、都知事になってからは、男社会と対峙（たいじ）する路線に転換したという。「これまでは年配の男性政治家にかわいがられ、引っ張り上げてもらいましたが、安倍（晋三）さんという自分より若い男性が首相になり、それが通用しなくなった。そこで前回の都知事選から、急にはちまきを巻き、男社会にいじめられるかわいそうな女性を演じ、『オジサン政治からの脱却』と叫んだ。その結果、中年以上の女性から支持を得られたのです」。実際、今回の知事選でも、報道機関の出口調査では女性の支持率の高さを示すデータがある。

女性政治家の「苦しさ」とは

歴代第2位の得票数で再選を果たした小池氏だが、石井さんは2期目はいばらの道が待っていると指摘する。「新規事業を次々立ち上げ、都の貯金にあたる財政調整基金もほとんど使い果たした。次の都政を担うのは貧乏くじなんです。だから、他に誰もやりたがらなかった、という面もある。自民党側は、好き勝手なお金の使い方をした小池さんに2期目で苦しんでもらって、ちゃんと責任をとらせたいという思惑もあるように思えます」。

奔放な小池氏。そんな「いばらの道」を4年間も務め上げる気があるのだろうか。「初の女性首相」候補と持ち上げられることもしばしば。国政復帰という野心のほどはいかばかりだろうか。実際、再選が決まった5日夜のテレビ番組で、ジャーナリストの池上彰氏に「任期を全うすると約束するか」と確認されると、「自身の健康をしっかり守っていきたい」と明言を避けたのである。

狙いはやはり、総理大臣か――。石井さんも大きくうなずく。「小池さんは（国政に）未練があります。首相になりたいという欲があるからです」。「そもそも都政には既に飽きていると思いますよ。元々、行政のトップという地道な作業が求められるポジションに、彼女は向いていない」と読み解く。ただその一方で、「1回の都知事選を実施するに、50億円くらいかかるといわれていますよね。大変な額の税金を使っているわけです。だから自分のステップアップのために都政を踏み台にして再び国政へ、頃合いを見て辞任、なんていうワガママは絶対に許してはいけない」と言う。

では「小池首相」誕生の可能性はあるとみているのだろうか。「大統領制ならともかく議院内閣制で、ありえるとは思いませんね」とピシャリ。だが、小池氏の来し方に一定の理解

を示すのだ。「時代の転換期に、小池さんのような女性が政界に出てきたのは仕方なかった部分もあったかもしれない。そういうふうには女性が出られなかったんですよ」

確かに男社会の政界で、オジサン政治家と真正面から衝突すれば、袖にされて消えていくのが世の習いだったろう。そこで生き馬の目を抜こうと思ったら、「すり寄る」の他に方法がなかったのかもしれない。だが石井さんはこう切り捨てた。「男性社会のいびつさを突いて彼女は権力の階段をはい上がってきましたが、これからの時代は、そのいびつさそのものをなくしていかなければいけない。女性政治家はもっと増えてほしい。でも小池さんのような手法を取るタイプは出てこないような政界に、社会にしていかなければいけないと思います」

「小池さんに直接聞きたいんです」

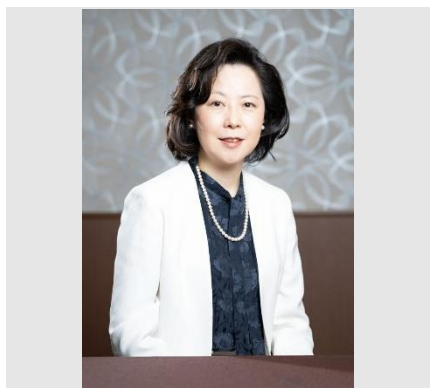
小池氏本人は「女帝」について質問されると、「読んでいない」を繰り返している。先述の池上氏の番組でも、「女帝」を読む予定はあるかと聞かれると、小池氏は「コロナで大変忙しくしております」と苦虫をかみ潰すような表情を浮かべていた。

石井さんは小池氏に何度も取材を申し込んでいるが、これまでもすべて断られているという。「この本で何かが違っているというなら、それを教えてほしい。（本で指摘した）学歴詐称疑惑には、きちんと答えてほしいです。他にも、小池さんに直接聞きたいことがたくさんあります。この本で書いたよりもずっと壮絶な人生だったと思う。どのような苦しみがあったのか教えてほしい。でも、きっと私に限らず、誰も教えてはもらえないでしょうね」

石井妙子（いしい・たえこ）

「小池百合子をつくった日本社会の問題点」『女帝』著者・石井妙子が斬る！

2020.7.5 20:30 [週刊朝日#小池百合子#林真理子](#)



20万部を超えた話題のノンフィクション『女帝 小池百合子』を書いた石井妙子さん。「おもしろい……！」と作家の林真理子さんも唸り、知り合いに薦めまくったほど。石井さんが同書で伝えたかったこととは。

林：『女帝 小池百合子』がすごい話題ですね。私、LINEで50人ぐらいに一斉に「読んでみて」って連絡したんですよ。

石井：ありがとうございます。いろんな方から「林さんに推薦された」という話を聞いて、「えっ」と思ってびっくりしました。

林：都知事選間近のこの時期にこんな本を出すのは彼女に気の毒だ、みたいな声もありますね。

石井：2年前に「文藝春秋」でかなりの枚数をさいて彼女の学歴詐称疑惑について書いたときはほとんど無視されてしまって、世の中もぜんぜん反応してくれなかったんです。それを今回「選挙妨害だ」と言われても、それはちょっと……。出版のタイミング（5月29日発売）も、都知事選ギリギリを狙ったわけじゃなくて、私、締め切りを破りに破って、「これ以上遅れてはダメです」と編集者から言われて。宣伝文句は「緊急出版」となってますけど、ほんとは「ノロノロ出版」なんです（笑）。

林：そうなんですか。この本、みんな有吉佐和子さんの『悪女について』みたいだって言いますが、私は、過去を隠して親子でさまよう、松本清張さんの『砂の器』みたいだなと思って。

石井：実は取材を進めるうちに、私も『砂の器』が思い出されて……。執筆時は毎朝、『砂の器』の音楽を聴いていました。

林：まあ、ほんと！ 『砂の器』だと思ったのは、やっぱり間違ってたんですね。私の友達は、「夜中に読んだら眠れなくなった」と言っていました。確かにコワい部分もあるけど、簡潔な美しい文章で、すうーっと入ってきましたよ。読み終わったあとは、しみじみ考えさせられるものがあって。

石井：周りの人からも「コワすぎる」というご意見はいただきました。共産党の小池（晃）さんも、「読み出したら怖くて止まらない」とツイッターで書いておられた（笑）。

林：それだけ話題になっている本ということですよ。石井さんは、「ノンフィクション作家には二つの罪があって、一つは書いたことの罪、もう一つは書かなかったことの罪」とおっしゃっていますけど、『女帝』はその程合いが素晴らしいですね。文学的にも非常に高い価値を持っていると思います。「暴露本だ」みたいに言う人もいますが、卑しい下品なところから出発してなくて、ノンフィクションってやっぱり志だなと思いました。志が低くないから感動的だし、読後感がいいんですよ。これだけいろんなイヤなことを読まされても。

石井：ありがとうございます。そんなお言葉をいただいて。

林：ノンフィクションって、すごくつまらないノンフィクションと、すごくおもしろいのがあるじゃないですか。

石井：はい……。あっ、「はい」なんて言って（笑）。

林：どれだけ資料を集めたかもあるけど、文章がうまい人じゃないとノンフィクションはおもしろくないということを、石井さんの本でつくづく思いました。

石井：ありがとうございます。

林：この本、小池さんの学歴詐称疑惑のことは一部で、小池百合子さんの的なものに非常に甘い、日本の男たちの姿があぶり出されていますよね。

石井：ええ。

林：これは飛躍した例だけど、たとえば「夕ぐれ族」（1982年に実在した売春あっせ

ん組織の名称) のころ、「私はいいところのお嬢さんで、学校は聖心に行ってます。でも、名前は出さないで」とか言って、その売春組織にいた自称女子大生の言うことは、みんなウソだと知ってるのに、マスコミの男の人、それに乗かってチヤホヤしたじゃないですか。そういう男の人たち、今は偉くなってると思うんですけど、ちょっと反省してほしいなと思いますよ。

石井：まさに共犯ですね。男の人たちの言い分を聞くと、「女の人を何とか引き上げてあげたいという善意からやったことだ」と言うんですけど、すべての女の人にそれをしてはいないような気がするんです。やっぱり「カワイイ女の子」が引き立てられるし……。

林：その「カワイイ女の子」というのも、ちょっとひねってなければダメなんですよ。女性であることを利用した人ほど、後になって『『ガラスの天井』(女性のキャリアを妨げる見えない障壁)があった』とか、「女性だからこういう目にあうんだ」とか必ず言うって石井さんはおっしゃってますけど、ほんとにそのとおりだなと思いますよ。

石井：実際に「ガラスの天井」で苦しむ女性もいますが、「あなたが言うのはちょっと」というケースもあります。小池さんがそうですが。結局、女の人が認められるには、本業で実力を蓄えるしかないと思うんです。でも、その本業が何だかよくわからない人、小池さんもそうですが、そういう人は年齢を重ねると行き詰まってくる。つまり**仕事の本質みたい**なところがないから、**実力が蓄えられない**。それで、人生の後半に、自分が思うようなポジションにいられないと「ガラスの天井があった」と安易に言ってしまう。

林：なるほど。

石井：でも、そうなっちゃうのは女の人本人の問題もあると思うんですけど、男社会の問題でもあるはずなんです。本業をしっかりとさせることができず、年齢だけ重ねてしまった女の方は、結局、権力を持つ男の人を頼り続ける。それは女の人自身の問題でもあるし、そういう人をつくり続ける日本の社会の問題でもあると思います。また、こうやって生きていく女性のことを書いたりすると、今度は「女が女をいじめる」みたいにされがちで。

林：そうそう。

石井：私も今回この本を書いたことで、「女が女を悪く言うと、ほんとに辛辣になる」

とか、「女が女に嫉妬して、成功してる女を引きずり下ろそうとするから、女ってほんとにコワイ」とかいう意見も来るし、何を言われてもべつにかまわないんですけど、いろいろ言われるものだなと。ノンフィクションは書くときも大変ですけど、書いた後も大変です。

林：本当にそうですね。私、それでもたぶん小池さんは都知事選で勝つと思うんですよ。

石井：私としてはやるべきことをやったし、書き手としての務めを果たしたという気持ちでいて、あとは皆さんの判断ですよ。4年前の都知事選のとき、小池さんは「悪のかたまりの自民党、オッサン政治と闘います！」と言った。女の政治家は善良でお金にクリーンで正義感にあふれている、と無条件に思い込んでしまう女性有権者の心理をうまく利用したと思うんですね。

林：またあのときは、石原慎太郎さんがいい役をやってくれたんですよ。「大年増の厚化粧」とか言って。あれを見て、私は「これで小池さん圧勝だ」と思いましたよ。

石井：小池さんは、日本人の西洋コンプレックスとか、縦社会の歪みとか、男性優位な社会構造のスキをついてうまくよじ登ってきて、あと一歩で総理というところにまで来た人だと思います。その責任は、私たち一人ひとりにある。私は小池さんを批判するというより、むしろそんな私たちの社会はどういう社会なのか、と。それを言いたかったんです。

林：ええ。本当にそうだと思います。しかしこの本を読んで、あらためて小池さんっておもしろい人だなとも思ってしまいました。皆さん「モンスターみたいな女だ」って言うけど、私、石井さんの本を読んでも決して小池さんが嫌いになれないんですよ。幼いころからの小池さんの人生を見せていただくと、「こうなったのもわかるな。こういう人生も、ありかもしれない」って思ってしまって、つい一票入れちゃうかも(笑)。

石井：なるほど(笑)。

>>【「小池さんの的な人」とは 『女帝』著者が語る「スキルより容姿」時代の弊害】
へ続く

(構成／本誌・松岡かすみ、編集協力／一木俊雄)

※週刊朝日 2020年7月10日号より抜粋

『女帝 小池百合子』 著者・石井妙子が語る、その熱狂と空虚と誇張

TBS ラジオで放送中の「ACTION」。金曜パーソナリティは、**武田砂鉄**さん。

7月10日（金）のゲストは、ノンフィクション作家の石井妙子さん。今年5月に発売された『女帝 小池百合子』が空前のベストセラーになっています。今日は石井さんに東京都知事選挙を終えて改めて小池百合子という人物について、武田砂鉄さんがお話を伺いました。

武田：都知事選を終えて、小池さんの圧勝でした。この結果をどうご覧になりましたか？

石井：まあ、予想はしていましたね。で、メディアは「圧勝」と報じていますが、個人的にはあまりそんな感じはなかったです。数字の上では圧勝なんですが、圧勝の熱がなかったですよ。熱のない圧勝で、それがまた不気味ですね。

武田：票を投じた人の熱がなかったということですね。

石井：そうですね、4年前は圧勝でした。皆が緑の服を着た人に対して熱狂の渦ができていましたね。

武田：あのころは小池さんの写真集も出て、それが重版されたりして。小池さんがアイコンとして皆が熱狂していた部分はあったと思いますが、今回はそれはなかったかもしれませんね。

石井：なにかを期待して票を投じた感じはなかったですよ。4年前は小池さんに対してなにか夢を見て、それを託した。今回はそれはなかったですね。

武田：石井さんがこの本を出されて、いろんなインタビューで答えられています。その中でも秀逸だなって思ったのが神戸新聞でのインタビューで、「**小池百合子さんというのはただのビニールシート。風に舞って高く上がるが、落ちてきたらエンジンも翼もない。でもビニールだから強い。どんな風にも乗れてしまう**」という（笑）

石井：随分と言葉がキツイですね（笑）でも4年前は本当に熱狂していたんです。「あんな空高く舞っているものはなんだ？さぞ素晴らしいものに違いない。どんな飛行物体で、どんなエンジンや翼があるんだ？」と皆思ったんです。でも希望の党で失墜して、私たちの足元に落ちてきたんです。そうしたら「なんだ、こんなものだったのか」とバッシングして皆で踏みつけました。「鳥や飛行機やロケットかと思ったら、風にひらひらと舞っていたビニールシートじゃないか」と。でも今回のコロナでまた高く舞って、「小池さん、すごい！総理大臣よりも総理らしい！」とまた「鳥か？飛行機か？」みたいになっていると。でもこれもただ小池さんが風に乗って舞っているだけで、また落ちてきたら国民は「なんだ、ただのビニールじゃないか」と批判します。ビニールシートの例えは当然小池さんへの批判なんですが、勝手に誤解して「騙された」という私たち側への批判も入ってきますね。

武田：この本って膨大な参考資料があって、その人物を浮き上がらせる、非常にオーソドックスなノンフィクション作品の作り方をされています。で、ノンフィクションというのはその参考資料をいろいろ紐づけながら、一つの人物像が浮き上がってくるんですが、小池さんというのは言っていることが全部違うので、資料を集めても「一体この人は何者なんだ？」となってしまいますよね。



石井：それで大変時間がかかりました（笑）実態が見えてこないんです。それで調べていくと、結論としては空虚でした。ようやく見つけた箱を開けたら、中になにもなかったような印象ですね。小池さんを調べた早い段階で辻褄が合わないことが多すぎたんです。資料を読むと、この時にはこう言っているのにその何年後には全く違うことを言っていたり。最初は誤植とか勘違いと考えてみても、あまりにもズレが多すぎるんです。なのでやはり、この人はかなり話を膨らませているのだと思います。嘘の多い人と言わざるを得ません。

武田：その嘘のスケールも大きいです。例えば小池さんが一度結婚されたとき、その理由が「第四次中東戦争が始まって心細かった」と言っていますが、調べると結

婚したのは中東戦争が始まる前だったんですね。これは話の盛り方というか、そもそも話の形がないですよ。『飛行機事故を2度回避したとあるが、その時期に飛行機事故はなかった』とか。

石井：そうですね、2回飛行機事故を回避したというのは辻褄が合わないんです。やっぱり自分を大きく見せたいとか、ドラマチックに演出したいとか、皆に憧れられるような経験をした人物である願望とか。また人が喜ぶような話を作りたくなるみたいですね。

武田：小学5年生のときの校内弁論大会で優勝したときのタイトルが「嘘も方便」ですからね（笑）こんなによくできた話、ありますか（笑）

つづく